

学会参加報告

赤松 萌鈴（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）

ワイルドライフマネジメント事業部広島事業所の赤松です。今回、私は日本哺乳類学会神戸大会に3日間参加させていただきました。業務の都合上初日は参加できなかったのですが、様々な発表を聞くことができ大変勉強になりました。

今大会において、個人的に興味深かった発表を紹介させていただきます。

自由集会 F12 では「哺乳類の行動生態学：ニホンジカ」というタイトルで、3人の演者の方が採食行動・空間分布の決定機構・対捕食者行動・配偶戦略など、様々な切り口からのニホンジカの行動生態に関する研究例を発表されていました。その中で東京農工大学の高田隼人先生による「空間分布の決定機構：なぜシカは過酷な高山帯へ向かうのか？」についての発表をご紹介します。

この研究は、富士山麓において糞塊調査を実施することで、ニホンジカの空間分布と人間による捕獲圧との関係性を検討したものです。調査地に含まれる富士山の高山帯は火山性荒原でありニホンジカにとっての餌資源が著しく乏しい環境ですが、2010年代からニホンジカの出現が確認されています。

調査手法としては、富士山麓の広域で60地点（計約30km）の糞塊調査を行い、さらに植物の現存量・最寄りの人間居住地までの距離・管理捕獲の実施の有無を調査地点ごとに記録しています。

研究結果としては、ニホンジカの空間分布は非捕獲地域・人間の居住地から遠い場所に偏って分布していることが明らかになりました。餌資源となる植物は中標高帯で資源量が多いことが明らかになりましたが、富士山麓では非積雪期に巻き狩りによる管理捕獲を中標高帯で行っていることから「恐れ

の景観（Land Scape of Fear）」が作り出され、その結果、低標高帯の人間活動に加え管理捕獲の影響が、ニホンジカの空間分布を高山帯の高標高域にシフトさせているとまとめられていました。

この発表を受けての感想としましては、本研究ではある程度の捕獲圧により空間分布を変化させることが可能であることが示唆されましたが、具体的にどの程度の捕獲圧なのかや狩猟方法の違いによる効果の差などは未実証の部分であり、さらに発表者の方とも言及していましたが、山の中腹での捕獲と近年増加している市街地付近への出没が関連している可能性も否定できないため、実際の管理に運用するうえでの難しさはあったと感じました。また今後、発表者の方は近年市街地出没が急増している同調査地において、もともと同一個体群であったと考えられるにもかかわらず、高標高帯域と市街地にそれぞれ分布を変化させた個体について、それぞれの環境での行動形質の違いに着目した研究や捕獲圧が高い場所に生息する個体の形質についての研究を直接観察などを用いた行動生態学の観点から進めていくとのことだったので、今後の発表を楽しみにしたいです。

社会人として初めて学会に参加させていただき、これまでは自身の研究テーマに関する発表（ニホンジカ・積雪地）を聞いていましたが、今回は他獣種に関する発表やマネジメントにかかわる法律・制度についての集会にも意識的に聞きに行ったことで、たくさんの情報収集ができ改めて自身の課題についても認識することができました。また、懇親会などで紹介していただくなど、これまで築いた交流関係から少しではありましたが人のつながりを広げることができたのではないかと思います。今後もぜひ学会に参加していきたいと思います。